Sep. 4, 1993：石垣島バンナ公園

新鮮な個体は少ないけれどもヤエヤマカラスアゲハの数も多い。九州以北種よりも後翅紋の赤味が濃くて、別亜種に区別されるジャコウアゲハも完全体を探して採る。頭上はというと青色の濃いミカドアゲハが林の梢をつたうように蝶道を形成して往来している。スピードゆたかに飛び交う本種を見やっていたその視界に一見して完全体ではないと分かる黒っぽい蝶が目に入る。滑るようにスーッと近づいてきたところを得意の横払い早業でネットイン。かなり鱗粉のおちたヤエヤマムラサキだ。通常なら逃がしてやるところだが、筆者にとっては図鑑でしかなじみのない珍種であり不完全体のままでもヤエヤマムラサキ初採集標本として残すべく三角紙に納める。

Sep. 15, 1999：石垣島オモト岳山麓

金子先生の車に便乗し、すぐさまヤエヤマムラサキの発生現場へと案内していただく。1997 年 9 月の最も暑い時間帯にひたすら歩いたなつかしい道を一気に走ってオモト岳山麓一角の目立たない林道へと入り込む。やがてヤエムラ終令幼虫がたくさん残るオオイワガネが目に入る。

数百頭の幼虫がバリバリと食ったあとで葉っぱのほとんどが裸にされている。金子先生によればもっと多くの幼虫がいたはずなのに数が相当減っているとのこと。よく観察すると終令幼虫が次々と枝から大きな幹に移り、さらに地面に向かって移動し始めている。まさしく蛹化場所を求めての移動である。金子先生と二人してこの移動を Video 記録する。すでに大半が今のようにどんどん移動したものと思われる。まだ葉っぱに残る 30 頭ほどを先生に借りた専用の吹流し容器に取り込み、あとはどこで蛹化しようとしているのかを探索する。オオイワガネ根元周辺はススキの仲間が適度に茂っているし、アブラギリやクワズイモなど蛹として下垂する場所には事欠かないのだが、どこにも前蛹がみあたらない。蛹もみえない。ブッシュにはいりこむと排水溝が設けてあって格好の蛹化場所にみえるが、前蛹も蛹も見つからない。1997 年 10 月の竹富島ではオオイワガネの根元すぐ近くに自生するクワズイモや周りの枯れ枝、あるいは 5m ほど離れた周辺のアブラギリ葉裏とか御嶽のコンクリート製軒下や天井部などで下垂する蛹をいくらでも観察できたのがウソのよう。

結局、オオイワガネの枯れ枝に 1 個だけの前蛹をみつけただけで、ここでの自然蛹発見は不成功に終わる。すでに数頭のヤエヤマムラサキ成蝶が付近のセンダングサを訪花しており、新鮮な♀の吸蜜場面をじっくり Video 記録してからネットに納める。この年は石垣島周辺であまねく大発生していて、竹富島でも多くの個体がみられた。

注）蝶紀行八重山諸島編では mpg ファイルで動く映像を見ることができます。

Sep. 17, 1999：石垣島某所（仮地名；金崎）

Copyright© 1999- Soft House JUMP. All rights reserved.

突然、何か黒っぽい蝶影が目の前を横切った気配に車をとめて降りてみる。リュウキュウムラサキ♂らしく Video やネットインの対象とするほどの個体ではない。ついでだからと辺りを探索するとやたらオオイワガネが多い。たちまち金子先生が食痕の特徴をもとにヤエムラの幼虫群を発見する。道路から幾分深く落ち込んだ崖下のオオイワガネである。幹を移動する幼虫も目に付くが蛹化のためではなくて、摂食のための新しい葉っぱへの移動だと分かる動きだ。

990917 石垣島金崎 ヤエムラ♀

道路反対側を奥へと進むと小道横の沢沿い一面にオオイワガネが茂り、そのあちこちにヤエムラ幼虫が群れている。群れの単位として 5 群以上というすごい規模だ。一番奥の葉っぱに後翅白紋タイプの♀が卵群を保護しているのが見つかる。先生が Video 記録を終えたあと、このタイプの♀標本がほしいばっかりに母蝶だけをネットインすべく軽くすくいとる。母蝶がまちがいなくネットインできたことを外から確認し、白紋タイプの飼育も目的として卵群の一部を持ち帰ろうと、母蝶が止まっていたはずの葉っぱを探す。ところがどこにも卵群のついた葉っぱがみつからない。そんなばかな。枝ごと手前に引き寄せて調べなおすがやはり卵群はどこにもない。葉っぱのシミを卵群と見まちがえたのか。いや、そんなことはない。まるでキツネにつままれたような心境。仕方なくネットのなかの母蝶を回収しようとしてアッと驚く。なんと捕らえた母蝶が例の卵群がつく葉っぱを離すことなくしっかり押さえ込んでいるではないか。ネットインの際はそっと母蝶だけをネットに誘い込むような採り方だったにもかかわらず、卵群から離れては大変と母蝶がその脚に渾身の力をこめたために、葉っぱもろともちぎれてしまったのだ。ここまで卵をかばい続けるのは一体どのような理由があるのだろうか。いや卵の段階だけではなく幼虫が 2 令となってもまだ保護し続ける母蝶を何度もみている。実は、このとき全卵持ち帰らざるをえなくなった卵群からは正常な孵化率がえられなかったばかりか、孵化した初令幼虫が全く摂食活動を示さずに餓死するという結果を招いており、例えば母蝶が幼虫に対して何か誘導物質を分泌しているとか、未だ誰も究明できていない神秘的な役割を果たしているような気がしてならない。

（画像ファイルに *Kaneko* と記した分は金子先生の Video 記録から転載）

ヤエヤマムラサキ母蝶の不思議な習性についてどこまで解明できているのか、2001 年に八重山諸島蝶紀行ハードコピーを添えて九州大学名誉教授の故白水隆博士あてに手紙で問い合わせたところ「蝶では唯一世界的にもこの習性は知られておらず、チャンと調べれば *Science*（筆者注：世界トップレベルの科学専門誌）にでも出してくれるほどのものと思います」、また蝶紀行についても「同好者のために蝶研フィールドあたりに出されたら如何かと思います。全文拝読しましたが有益で、自然に対する考えも含まれていて皆のためになると思います」とのありがたいコメントを含むはがきの返事をいただいた。

上記 1999 年の筆者らによる観察記録に加えて金子實先生による“母蝶がいなくなったあとも正常に成育できた”克明な記録をまとめ、この母蝶の習性に関する第一報を、蝶研フィールド 17(6):9-13, 2002　に日本語で発表した。白水先生のアドバイスに応えてなんとか英語論文として世界に発表したいと準備を進めるうち、実は、世界的にもこの習性が知られていないという点については白水先生もお気づきでなかった先行研究結果が 1988 年に海外研究者によって発表されていることが分かったが、幸い筆者らの記録は彼らの論文には記載のないいくつかの新知見を含んでおり、さらには石垣島に移住されて以降ヤエヤマムラサキ母蝶の習性に関する複数の記録をとられていた入野祐史さんの情報もいただいて、ヤエヤマムラサキの母蝶による卵保護の意義についての研究論文として、日本鱗翅学会誌：*Trans. Lipid. Soc. Japan* 59(1):49-54, January 2008 に英文による発表ができた。

Copyright© 1999- Soft House JUMP. All rights reserved.